

フォーラム型の人類智発見・創発支援システム： 文化資源の共有と活用を目指して

久保正敏

国立民族学博物館・博物館民族学研究部

民族誌資料・情報センターの使命も担っている国立民族学博物館では、文化人類学分野における近年の反省を踏まえ、資料収集や情報整備に「共同性」を積極的に取り込み、同時に情報の集積の中から人類智発見につながるような、「フォーラム型の人類智発見・創発支援システム」構築を指向しようとしている。これは、今求められている、多文化共生の道の探索にもつながるであろう。

Forum-type Documentation Support System for Discovering Human Wisdom:
managing cultural resource toward multi cultural coexistence

KUBO, Masatoshi

Dept. Museum Anthropology, National Museum of Ethnology

The National Museum of Ethnology is trying to encourage collaborative documentation activity reflecting the recent trends in cultural anthropology. Hopefully establishing “forum-type documentation support system” will help to quest for multicultural coexistence.

国立民族学博物館（略称 民博）は、人類社会の多様性の発見とその知的遺産の継承をめざして民族学（文化人類学）研究を進めると同時に、民族誌資料・情報センターの役割も果たしてきた。収集されてきた民族誌資料の形態・種類は多岐にわたっている。モノ（生業用具、生活用具、儀礼用具、などの人工物）、写真、映像、音声・音響記録、フィールドノート、など、フィールドワーク途上での様々な記録や収集物が含まれ、表現メディア形態（文字、画像・映像、音声・音響）や情報の回数も様々である。

今や、資料情報センターとしての民博には、これまでのデータ蓄積、デジタル・アーカイブ形成の段階を踏まえて、集積されたデータ間の関係性の中から発見を求め、人類智の総合的な結集へと踏み出すことが求められている。すなわち、民族学研究者の現地調査における民族誌的発見のフェーズだけでなく、それらの膨大な集積の中から人類智を発見するフェーズにおいても、民博が果たすべき責任が大きくなっている。

他方で、文化人類学分野では、従来のような民族誌資料収集や記述に対する見直しが生まれ、J.クリフォードのように「文化を語ること」「文化を翻訳すること」とは何かを突き詰めて考える動きがある。従来の民族誌は、書き手とテキストを権威付けて客観性を謳うためのレトリックに満ちているが、そもそも客観的なテキストはあり得るのかという問題(1)、書き手と対象文化出身者の間には、政治的・経済的・文化的権力がもたらす非対称性（しばしば植民側が被植民側を記述する）が厳然と存在する点(2)、西欧言語という強い言語で口頭文化を文字化することによる固定化や権威化(3)、などを問いかける。ポスト構造主義と呼応し、既存の権威や、自己と他者の区分について脱構築を提唱するものと言える。

これは、民族誌記述に重点を置いた見直しだが、資料収集や取材、写真撮影についても同じ事が言え、特に(2)に関しては、資料の持ち去りや非現地語のみによる記述は、現地からは「文化の剥奪」と見なされても仕方がない状況である。こうした反省に立って、今後の資料収集や情報化の指針を打ち立てることが必要であろう。また、集積された資料数や情報量が膨大化した事態に対処するドキュメンテーションの方法論も確立せねばならない。

上記(1)、(2)の問題の解決方法の一つは、「共同性」の徹底であろう。(1)に対しては、「一次収集、一次記述とその後の参照・活用との間での共同性」の推進である。記述や収集はいずれも現実の切り取りの一つに過ぎず客観性を謳うことは無理だと認め、その代わりに、どの時点でも、収集や記述の責任は署名によって明確化されるべきことを前提とする共同性である。それに伴って、知的所有権保護や認証制度を充実させる必要がある。

(2)に関しては、「現地と非現地との間の共同性」を追求することが解決法の一つである。例えば、資料は現地に残し、それに関する記述を共同で行い、その結果の共有を推進する。

こうした共同性を保証できる情報化の運営体制とシステム構成を考えることが、民博が今後推進すべき方向性の一つである。いうならば「フォーラム型の人類智発見・創発支援システム」である。これが実現すれば、次のような効果が得られるであろう。

・専門家占有から共有・共創へ

民族学研究者のみが専門性を持つという傲慢が否定される今、現地研究者・現地関係者・異分野研究者・非専門家が集い合うフォーラム型共同作業と知の共有の中にこそ、互恵的な成果が得られる。

・研究倫理の転換

研究者が一方的に現地から文化剥奪を行ってきた従来の手法から、現地の知的所有権を保証する研究手法へ転換し、一方的な剥奪から、現地との共有・共同型の情報収集と人類共通の知的財産形成へ、という流れを確立する。

・共有による情報の高精度化

現地関係者との共同による現地情報処理方式、いわば「ポイント・オブ・フィールド方式」情報化によって、情報収集・処理が高品質化される。利用者の serendipity (発見能力) を発揮させる手法である。さらに、精度の低い過去の民族誌記録に対しても、それを現地にフィードバックすることにより、現地から情報が追加され情報の質が高まる。

・現地への文化的還元

過去に集積された情報の現地との共有は、失われた現地文化の復元・伝承・復興に寄与できる。特に、グローバル化の進行と共に、既存文化の急激な変化が進む一方で、自文化表象・主張の手段として、失われつつある文化の復興に努める集団も増加している現在、現地への研究成果還元の大きなチャンネルとなり得る。

・知識データベース構築の中から人類智発見へ

実世界の情報の宝庫である民族誌データに、データマイニング手法を適用すれば、人類智を表現する概念モデルとしての、人類智オントロジーの構築の可能性もある。

・文理融合の効果

もっぱら民族学研究資料としてのみ捉えられてきた民族誌資料は、環境・開発・平和など世界的な問題解決の糸口となる情報を含んでいる。人文系の情報を社会科学系や自然科学分野の人々とも共有するなかから、人文系と理科系の学問融合への架け橋となる。